

上海交通大学で近代日本史を講じている知人と共に、海港検疫の歴史を調べている。日本の西端にあり、大陸に向かって開かれた長崎、長崎とゆかりの深い上海、この二つの町で、どのような感染症がどのように流行したのか、感染症の流行に対して講じられた対策はどのようなものであったか、その時、上海や長崎に居留していた外国人たちは感染症流行に対し、どのように反応したのか、そんなことを、当時の残された文献などから調べている。英国の公文書館には、当時の長崎総領事が本国へ送った報告の数々が残されている。その写しの一部は旧長崎県立図書館資料として保存されていたし、現在は長崎歴史文化博物館に収蔵

# なごり



やまもと たろう  
山本 太郎

資料として保存されている。閲覧願を出せば、誰でも閲覧できる。その知人と共に、長崎の町を散策した。熱帯医学研究所のある坂本町から、旧浦上街道を南に歩く。

山王神社から坂本国際墓地を経て、西坂に至る。坂本国際墓地には、「1918年没」と書かれた墓碑もある。スペイン風邪が日本でも猛威を振るった年だ。

西坂から歴史博物館のほうに道をとると、私の好きな聖福寺が見える。階段を上がると山門の手前に惜字亭(しゆくじてい)がある。れんが造り漆喰(しつくい)塗り六角形の小さな炉だ。寺内の不



要な文書類を焼却するのに使った炉だが、字を惜しむ。山門を上がると本堂があり、その正面に消えかかった額に「大清国賜状元及第」とある。科挙に最優秀(状元)で

合格したときに賜った額であることを示す。そこから、歴史博物館をかすめ、桜町小学校の横から中島川に下り、川を越えて寺町を歩く。寺町から銅座、丸山、さらに大徳寺に抜け、唐人町跡を下り、オランダ坂を経て大浦に向かう。最終目的地は大浦の国際墓地。墓地には、横浜で天然痘対策に従事した英国海軍軍医のジョン・ニュートンが眠る墓がある。半日かけて回った。いろいろなことを考えた。しかし最後に思ったことは、外国で客死しその地に眠る人々のことだった。何を思い、何を考え、日本での生活を送ったのか。100年以上も前のことだが、そんなことを考えさせられた。

(長崎大熱帯医学研究所教授)